

交流紙 <農>の心 <暮らし>のきずな

第4号(その2) (2012年4月5日発行)

(その2) 津波被災地を訪ねて(続)

南三陸町志津川

まち全体の甚大な被害、  
そのなかで「復興名店街」がオープン。

北上川をあとに十三浜のリアス海岸を経て南三陸町志津川に入った。中心部に志津川病院があった。4階まで津波に襲われた痕がそのまま残っている。



5階建の屋上は避難所に指定されていたが、避難誘導中の看護師ら4人の病院スタッフと屋上に避難し切れなかった入院患者67人(全109人中)が津波に飲まれた。また、津波から逃れた約150人が当院に取り残され、翌日12日から救出されたが、救出が間に合わなかった患者7人が死亡した。



震災前の写真(仮設「名店街」掲示)で見ると、ほんとうに美しい町である。それが、3つの丘の

上の小中高の学校以外はほとんど全滅したのである。写真の真中右にある白い大きな建物が老人ホーム「慈恵園」である。海拔15mに建てられたにもかかわらず天井近くまで津波が来て、高齢者48人(67人中)と職員1人が亡くなった。すぐ上にある高校へ避難しきれなかったのである。

写真右下隅の白い四角の建物が合同庁舎(ここも被災している。下写真左)であるが、その脇に仮設「志津川復興名店街」が2月25日オープンした。



私たちが着いた時にも、観光バスが1台訪れ、お客さんが買い物をしていました。

「名店街」の組合事務室があったので立ち寄った。会議中であつたが、この仮設商店街の立ち上げを支援した神戸の大正筋商店街の伊東さんのこと、私とその隣の鷹取商店街の復興に携わったことを話すと喜んで迎えてくださった。一緒に写真を撮らせてもらい、「がんばってください」とお伝えした。



その後、少し町寄りにぼつんと立つ「理容店ポプラ」を訪ねた。佐々木さんが南三陸町民の避難所になっていた鳴子温泉を支援した時に知り合った小山さんである。お父さんと一緒に昨年 11 月 22 日に店を開いた。(お店の写真は昨年 12 月のもの)



お父さんは、「最初は仮設商店街に参加していたが、遅れるので先に始めた。助成金の査定は厳しかったがなんとか開店にこぎつけた。けれど、思ったほどにはお客さんが来ない」と言う。「今後の復興の見通しはどうですか」と尋ねると、小山さんは、「先は見えない。役場の課長以上の人が会議中にみんな津波で亡くなったので、復興を進める人がいないから。神戸市が応援に来ているが、高台移転して作る町を、住居地域と商店街地域に分けるという計画を出している。私は反対だ。住宅と商店が一緒でない町は住みにくい」と。阪神大震災の折に神戸市の復興策に多くの被災住民は苦しんだので「神戸市のやり方には気をつけて」と言わざるをえなかった。別れを告げ、古川へ戻った。

仙台市若林区

**庄子さん、農業を再開して少し元気に。**

30 日には仙台市若林区で津波被害を受けた庄子さんを再訪した。海岸に近い地域はまだ水がたまっているところもあり、市は危険地域として引き続き居住を禁止している。(次の写真左)



その一つ内陸側は居住が解禁されている。建て残った家屋の若干に人が戻っている。庄子さんの家もこの辺りにある(上の写真の右)。

庄子さんは、みなし仮設のアパートに住んでおり、親戚の畑を借りて秋野菜を作った。「白菜、大根ができたので、20 軒以上のお得意さんに配って歩いた。皆さん喜んでくれて“次は買うから作ってね”と言ってくれ励みになった。3 月からはとれたものを朝市に出している」と。



この地域 40 数戸のなかで同年輩の方 1 戸が避難所を出て家を借り、作業場が大丈夫だったので、機械や保冷庫を自分で修理し、農業を再開した。早く津波が引いたところは塩害がそれほどでもない。「夏に作ったサニーレタスが高く売れ、軽トラックも買い足し、若い人たちにも助言している。けれど 40~50 歳代の若い人がその動きに乗ってこない。大型機械化していたので流された機械類の損失が大きいからだろう。今はガレキ処理などの仕事をしている」と。

ご夫君は不在であったが、「まだ元気がない」という。津波に流され 7 時間も電柱にしがみついて助かったということである。まだそのショックから立ち直れないとしても無理はないだろう。

「お元気で、また来ます」と言って若林区をあとにした。